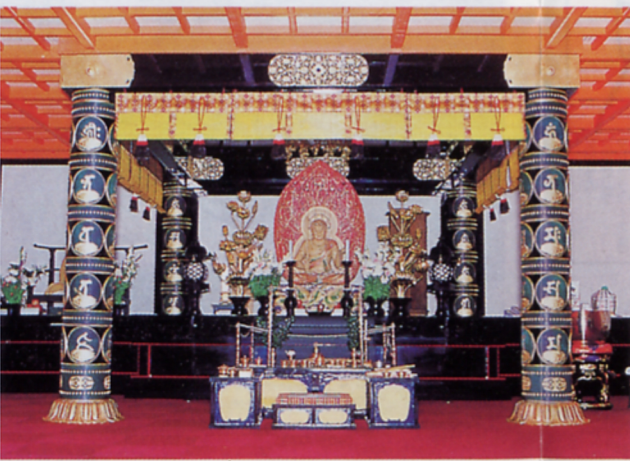


名	称	解	説
国宝	願成寺阿弥陀堂	堂は願成寺をさる二〇〇米の境外地にあり、方三間 ^{（方三間）} 単層宝形造り柿葺 ^{（柿葺）} で、内陣の四天柱は十二光仏を図現し、本尊表裏の来迎壁板には壁画阿弥陀来迎図の跡があり、長押にも縹緗彩色の宝相華の文様が残っている。内陣、外陣共折り上げ小組格天井で、殊に内陣小組格天井毎に宝相華の文様が画かれ、その一部が残っている。堂内周囲の壁板にも全部壁画が図視されておったが、悉く剥落し、一面に僅かにその面影が残っている。御堂の典雅、優美、四方の流線等、平安時代の芸術的な建造をしのばせる。この規模構想は奥州三代の富強榮華を物語る平泉金色堂と同時代の様式で造営されたものである。御堂を圍繞する小高い山々を借景として八葉蓮弁に凝し、この盆地の北端に正南面して建立された。御堂の東西苑池にて、満々たる池水に映ずる気高い御影にはるかな平安の夢をまのあたりに忍ばれます。	
国重文	本尊阿弥陀如来像	本尊阿弥陀堂如来は、寄木造漆箔の御像で、静かに流れる浅い納衣の衣文、透彫の飛天光眷と十重の蓮華座に坐るこの時代の典型的なものである。こま目のよく整った螺髪 ^{（螺髪）} 、まことに円満具足な重厚温雅な慈眼、名工定朝の完成した優雅な像容が一つの類型に達したさまがよくわかる。造巧はまことに丁寧で、仏、光、座のすべてが入念であり、台座の魚鱗式蓮台、華盤、反り花などに魚々子を刻んださまはこの時代の代表的な手法を示している。如来は、世間の人々の願を四十八願に分け、一々その心願成就をせしめんとする本誓で衆生摂取の上品下生の印を結ばれている。拜む心は生きている喜びである。	
国重文	観世音菩薩立像	観世音菩薩は本尊と同じく寄木造り漆箔の御像で、魚鱗式の蓮台に丸形の二重光眷の中にすらりとした整った美しさで立っておられる。観音は勢至菩薩と共に本尊の脇侍として阿弥陀三尊と申され、勢至と共に阿弥陀の命で極楽往生を願うものを送迎する役をもち、観音菩薩は救世を司る仏様である。	
国重文	勢至菩薩立像	勢至菩薩は観音と同じく、寄木造り漆箔の御像で、同様の型式の整った立像である。勢至菩薩は「智の勢いいっさいに至る」といわれる智の部分の司る仏様である。	
国重文	持国天王立像	持国天王は寄木造り、極彩色の御像である。この天王は東方に位し、よく仏法擁護の武人のお姿が表現されている。左手を振りあげた軽やかなポーズ、袖線の流暢なかまえ、本尊の静と対照的な動的総合美、両足を上向きの邪鬼（煩惱）の上に踏み活動的な姿勢をとっている。	
国史跡	多聞天王立像 増長天王 平安時代	持国天王と同じく、仏法護持の武人の御姿で北方に位する。持国天と対照して、阿、吽、陰、陽を、吽陽として表現している。右手をあげ、伏せの邪鬼を踏んでいる。この二天は忿怒の相であるが、この時代の特徴とし、邪鬼共に柔和な感じを受ける。	
	浄土庭園	昭和四十一年九月十二日阿弥陀堂境域（浄土庭園）五万六千余坪が国史蹟に指定され、これに伴い、東西の苑池が復元された。中島、南大門、二橋架橋、その規模、庭園様式等わが国文化史上特筆される浄土庭園である。浄土曼荼羅は極楽浄土を絵画化したものである。この曼荼羅から阿弥陀三尊、外仏菩薩をとり除いて、曼荼羅の構図を寺院境内の地割にうつしたのが浄土庭園である。	
	市重文 法華経版木 平安時代	南大門、南橋、中島、北橋、金堂を南北につらぬく線が庭園を二分する地割中軸線をなし、曼荼羅の構図を境内にうつしている。東西池は宝池会の部分にあたり、中島は三尊会の部、金堂の建築物は宝楼宮殿会に相当する。したがって池は八功德水をたたえ、七宝池を意味し、中島にかかる橋は善男善女を救済する弘誓の橋といわれる。	
	願成寺別院高野山 （山の坊）	（妙法蓮華経第七巻 印板藤原氏女） 原版木は御堂に収蔵されており、これにより中世東北に開版の事実が始めて知られるに至った。	
		当別院は天正年間に開創いわき高野山と称し本尊不動明王を安置せる遍照光院、奥の院（弘法大師堂）、女人堂、地藏堂、西院の河原、僧坊等が建てられ加持祈禱と弘法大師信仰の根本霊場であった。特に紀州高野山に参拝出来ない地方民のために創建され明治初年まで隆盛を極めました。然し一山不慮の火災にて焼失し、阿弥陀堂浄土庭園整備記念事業の一環として別院復興の発願がなされ鐘樓堂、枯山水西院の河原庭園六角地藏堂、遍照光院の再建成就を見ております。特に毎年八月二十四日地藏盆には、万灯供養が厳修され山内一帯に二万数千本のローソクが点灯され光と闇の光景は極楽浄土が具現されます。	



国重文(平安時代)

願成寺別院不動尊遍照光院内陣



※酒類に酔った人、他人に迷惑をかける行為をなす者の参拝はお断りします。